記録

湯平温泉にて

会員　岩田善市

もう昨年の夏になるが、私は湯平温泉に遊んだ。温泉街は、花合野川の谷間、ごうごう流れる激流の両岸、山の斜面にできた段々の屋敷に、重なり合うように、五十五軒の旅館と、商店・民家がひしめきあって一団をなしている。その中を通る石で畳んだ坂道は、珍らしく変った風景である。

空は青く、空気はすみ、山々は濃い緑一色に、風はひやりと吹き、下界は三十度を越す暑さにあえりているが、ここはクーラー不要の別天地である。

温泉は弱食塩泉で、胃病の妙薬とされ、朝、昼、夜と入浴し、湯をかけて腹をあたため、間に温泉を飲むのであるが、これがまた心地よい湯浴になる。湯につかって効き、たらふく飲んで効く、病魔を体の内外からはさみ打ちにするのである。静かな湯治の温泉場は、またよき避暑地でもある。

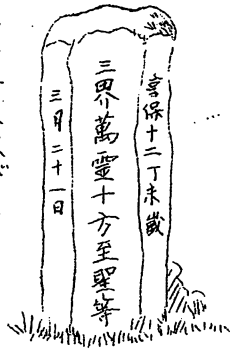
山々は霧たちこめて水の音
いよいよ高し　雨の湯の平　　菊池幽芳

わたしや湯の平　湯治のかえり
肌にほんのり　湯の香り　　野口雨情

つれづれなるままに、私は郷土史にくわしい人を捜して歩いた。せまい町のことで、金子商店という みやげ屋の主人金子信弘さんを見つけるのに、手間はいらなかった。金子さんは商売のひまに、一人こつこつと郷土史に取りくんでいるとのことである。

「ここにはたいした歴史はありません。案内地図が橋のたもとにありますから、実地見学をして下さい。それぞれ簡単ではありますが、由来記を書いておきました。」

と、親切に教えてくれた。



私は先ず熊の板供養塔に行った。道下の谷川のほとり、草むらの中にぽつんと立つ自然石の塔である。

この傍らに、次のような掲示案内板が立ててある。

八代将軍吉宗、享保年間当地に洪水山津波度々あり温泉場の人家流失し、死者多く出づ。悪疫流行し死する者あまたあり。村民、穏田村少林寺の寒石和尚に病魔退散の御祈禱を懇請す。同寺の豪僧大空雛幼命を受け之を鎮静し、治水の名高き谷村の工藤三助等を呼び、温泉場を修理開発し、当所に石橋をかけ、死者の為に供養塔を建立す。即ちこれなり。当温泉場の石畳路は三助の遺せしものなり。

（悪疫流行　古文ニ曰ク　大蛇ノ毒気ニ当リ村民死スル者多シト）

湯平温泉観光協会

（昭和五十年四月記）

災害防止を神仏に祈り、被災者を供養する、その気持ちは、今も昔も同じである。復興の努力も大変なものであったであろう。

湯の平の石畳の坂道は有名で、今も尚往時を物語っている。だが、一部コンクリートを上にきせてしまったのは、惜しいことである。この一枚の案内板によって、こうした歴史を語るのも、うれしいことではないか。他山の石としたい。

私はここで、わが佐伯の郷土史をくり、洪水被災を調べてみた。

享保二年七月七日　大風雨　洪水
同　六年七月六日　洪水
同　七年七月九日　大風雨　洪水　市中浸水一丈余
　　検分の役人新道にて三人溺死
同　十四年八月十九日　大洪水　潰れたる家六二四戸
　　神社二　船六四　圧死者四
同　十九年七月二十六日より二十八日　大風雨　洪水

とある。他人ごとでなく、このころ佐伯も莫大な被害を受けている。なみなみならぬ苦労をしたことであろう。

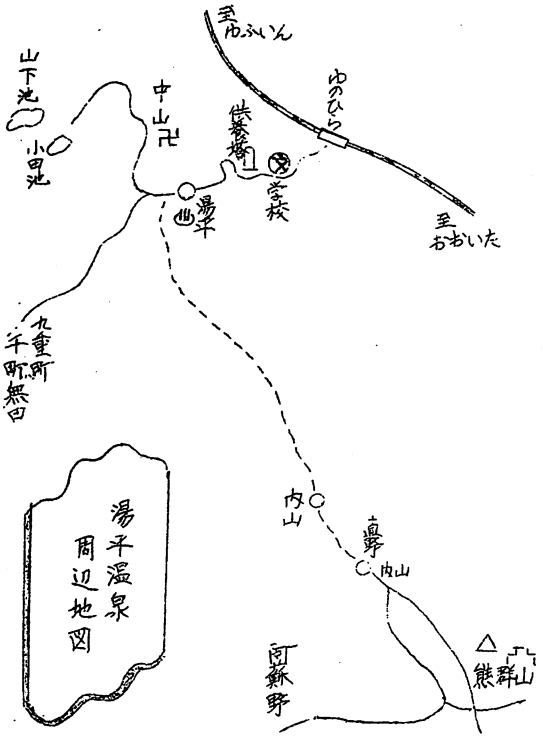
小高いところに、大きい一本松が浴客の目をひく、ここは三社遥拝所で、小さい神社がある。正面にかかげた額に、尺間大神　宮地嶽　金比羅　と三社を並書きしてある。有難いことに佐伯の尺間神社の信仰が、ここにも根付いていたのはうれしかった。

ここから程近いところにある、中山神社と中山観音に参拝する。ここにも由来記の掲示があったのはいうまでもない。

観音堂由来記

亀山帝文応元年、帝の寵臣麻生摂津守藤原秀勝帝より賜りたる一寸八分の黄金の観音像を持し当地に来り、景色小夜の中山に似たるを以て、当地を中山と名付け坊舎を建立し、亀山山報恩寺と称し、温泉場を開発し土民を教化す。

其の後三二〇年を経たる天正八年（大友義統の時）権臣田原紹忍の讒に合い、田北山城守熊群山に攻め亡さる。追手に加わる由布院の温湯左馬之助十ノシタン信者にて、帰陣の折当寺を焼払う。後水尾帝元和四年秀勝の末孫麻生善兵衛再建す。現在の観音堂は昭和十年の建立なり。尚横津守の墓は東南一五〇mの所にあり。

湯平温泉観光協会

（注）
○田北浄忍は田原紹忍のあやまり、
○田北山城守は竹田岡城主田北紹鉄で、豊筑乱記には田北大和守入道紹鉄と出ている。
○関連文献　・大分県御土史料集成戦記篇　・大友記
・豊筑乱記　・西豊記の中田北紹鉄最期の項